

2022 年度第 2 四半期 決算報告

説明要旨

2022 年 10月31日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/221031.pdf>

【説明内容】 (取締役常務執行役員 曾根 芳之)

p. 2 2022 年度 Q2 (第 2 四半期) 総括とセグメントの概況

総括：Q2 連結実績は対前年同期・対前期ともに増収減益。原料価格は下落、為替は円安が進行。新型コロナウイルス感染拡大によるリモート・巣ごもり需要は落ち着いてきている状況。

エラストマー素材の概況は、販売価格の改定が進み、YoY・QoQ ともに増収増益。合成ゴムは主力工場の定期修繕のため出荷量調整を実施するも、需要は堅調。

高機能材料の概況は、YoY・QoQ ともに減収減益。光学樹脂は医療その他向けで需要堅調だが、光学フィルムは巣ごもり需要の反動により需要低下。電池材料は民生向け需要に一服感。LIB 原料価格高騰の影響等で顧客稼働率の低下が影響した。

p. 3 2022 年度 Q2 の事業環境 (為替・主原料推移)

為替は、対前年同期・対前期ともに US ドル、ユーロともに円安に推移した。世界的なインフレと金融引き締めによる原料価格の下落に連動し、国産ナフサ価格は、対前年同期では 1.5 倍と高値圏で推移しているが、対前期比は 7% 下落。アジアブタジエンは、アジア地区でのクラッカー新設投資稼働により供給が緩み、対前年同期・対前期ともに下落。

p. 5 2022 年度 Q2 業績サマリー (全体)

四半期実績は、売上高 998 億円、営業利益 95 億円、経常利益 115 億円、当期純利益 87 億円。対前年同期比：売上高 +79 億円、営業利益 ▲16 億円、対前期比：売上高 +23 億円、営業利益 ▲13 億円。

2022 年度上期実績は、売上高 1,974 億円、営業利益 202 億円、経常利益 244 億円、当期純利益 174 億円。対前年上期比：売上高 +183 億円、営業利益 ▲48 億円。

なお、四半期売上高 998 億円および半期売上高 1,974 億円は、いずれも過去最高。

p. 6 2022 年度 Q2 業績サマリー (セグメント別)

売上高は、エラストマー素材 579 億円、対前年同期・対前期ともに増収。高機能材料 265 億円、対前年同期・対前期ともに減収。

営業利益は、エラストマー素材 53 億円、対前年同期・対前期ともに増益。高機能材料 47 億円と対前年同期・対前期ともに減益。

p. 7 2022 年度上期 業績サマリー (セグメント別)

緑色でハイライトしている 2022 年度上期予想は、4 月 27 日時点の当初業績予想であり、中国ロックダウン影響の長期化やディスプレイ市場の在庫調整の深刻化など、この時点で不確実だった前提は含まれていない。

エラストマー素材は、上期予想に対し、売上高 34 億円、営業利益 17 億円の上振れ。高機能材料は、上期予想に対し、売上高▲51 億円、営業利益▲26 億円の大幅な下振れとなった。差異要因は p. 2 の概況でご説明した内容と同様。

p. 9 エラストマー素材 概況

左のグラフは、国産ナフサ価格とエラストマー素材の売上高の推移を示している。

国産ナフサ価格は Q2 に下落するも、合成ゴム中心に Q1 の原料価格に基づく販売価格改定が進み、売上高は増加した。

右のグラフは、合成ゴムの 21 年度 Q2 の出荷量を 100 とした場合の出荷量推移を指数で表している。

2022 年度 Q2 の需要は堅調ながら主力工場の定期修繕のため出荷量調整を行っており、対前年同期は出荷量減、対前期では出荷量横ばいとなった。

p. 10 エラストマー素材 P/L

エラストマー素材セグメントにおける各事業の状況について、出荷量は 21 年度 Q2 の出荷量を 100 とした指数でお示ししている。

合成ゴムは、主力工場の定修により出荷量調整を継続。化成品は販売価格改定を進めた反動減を受け、エラストマー全体で対前年同期・対前期ともに出荷量減。

ラテックスは対前期で出荷量が増加しているが、手袋市場在庫過多の状況は継続中であり、需要の回復は来年度以降を見込む。

売上高については p. 9 でご説明済みのため割愛し、次ページで営業利益についてご説明する。

p. 11 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

化成品出荷減の影響により数量差は 7 億円の悪化。販売価格の改定が進み価格差 25 億円良化。円安により為替差は 13 億円良化。原価差は、棚卸資産関連費用で約 7 億円の良化と在庫価格影響及びエネルギー価格の高騰で約 20 億円悪化との合計で 13 億円の悪化。販管費差は、物流費の上昇及び間接部門での費用配賦が増加し 6 億円悪化。以上の合計で営業利益は 12 億円の良化となった。

p. 12 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

こちらは、営業利益を対前年同期と比較したものであるが、対前期と傾向は同じであり、ご説明は割愛させていただきます。

p. 14 高機能材料の P/L

高機能樹脂の売上高は、光学フィルムの需要低下を背景に、対前年同期・対前期とも減収となった。

高機能ケミカルの売上高は、EV 向け電池材料において対前年同期で出荷量が増え、増収だが、対前期では出荷量が減り、減収となった。

p. 15 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

光学フィルム・電池材料・化学品の出荷量減により、数量差は 26 億円の悪化となったが、これは市場環境の変化に基づくものであり、詳細はこの後の出荷量のページでご説明する。

価格差は、スマホ向けの中小型向けフィルムの構成割合が増えたことにより 3 億円増加したが、原価差は光学フィルムを中心に Q1 に製造した価格の高い在庫の影響を受け、5 億円悪化した。以上により、営業利益は合計で 23 億円の悪化となった。

p. 16 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

こちらは、営業利益を対前年同期と比較したものである。光学フィルムの出荷減により数量差は 12 億円悪化した。販売価格改定による価格差と為替差で 34 億円の良化。原価差は、棚卸資産関連費用 7 億円悪化を含む 36 億円の悪化、販管費差は海上運賃上昇等により 9 億円の悪化。以上により、営業利益は合計 24 億円の悪化となった。

p. 17 高機能ケミカル事業：電池材料の状況 (出荷量)

表は、電池材料の出荷量を対前年同期、対前期と比較したものをお示ししている。

EV 向けは対前年同期比 130%、対前期比で 82%となった。四半期では、LIB 原料価格高騰による電池メーカー稼働率低下等の影響を受けて顧客の稼働率が低下し、当社出荷も伸び悩む結果となった。

民生用は、家電およびモバイル端末向けの需要の一巡、世界的な買換え需要停滞の長期化による一服感が継続している。

p. 18 高機能樹脂事業：光学樹脂の状況 (出荷量)

光学用途向けは、新型コロナウイルスおよび半導体不足の影響により顧客の稼働が落ち込み出荷量減となった。このため、医療その他用途向けは、プレフィルドシリンジ等の医療包装材料向けの展開を推し進め、対前年同期・対前期ともに出荷量増となった。

p. 19 高機能樹脂事業：光学フィルムの状況 (出荷量)

中小型向けは、スマホ用途が全体として堅調であったものの、中国中心にインセル化の影響等によりタッチセンサー用フィルムの出荷が落ち込んだ。

タブレット・ノート PC 向けは、QoQ で出荷量横ばいだが、YoY では巣ごもり需要一巡により伸び悩んだ。

大型 TV 向けは、Q2 から TV メーカーの大規模な部材調達停止が始まり、出荷量が大きく落ち込んだ。現時点では Q4 以降の需要回復を見込むが、需要低調が長期化するリスクもあり、注視していく。

なお、当社から見た用途別の市場動向については参考資料をご確認いただきたい。

p. 21 B/S 概要

こちらは貸借対照表の概要である。

総資産は、定期修繕によるエラストマー素材製品の在庫積み増しによる棚卸資産、価格改定による債権を中心に流動資産が 230 億円増加し、さらに、固定資産の 178 億円増も加わり、前年同期比 408 億円増の 5,255 億円となった。こちらに原料価格高騰による買入債務、修繕引当金、短期借入金の増加と社債の償還を差し引き、純資産は 240 億円増加となった。

p. 22 C/F 概要

営業キャッシュフローが大きく減少しているが、定期修繕のための在庫積み増し 210 億円が主な要因である。こちらは Q3 以降に在庫の払い出しが進むことで改善を見込んでいる。また、財務キャッシュフローが大きく減少しているが、22 年度上期に社債償還で 100 億円、自己株取得 40 億円、配当 32 億円のキャッシュアウト、短期借入で 39 億円のキャッシュインが発生したことが要因。結果として、フリーキャッシュフロー▲79 億円、トータルキャッシュフローは▲216 億円となった。フリーキャッシュフローは Q3 以降、営業キャッシュフローの改善に伴いプラスに転じる見込み。

p. 24 2022 年度 事業環境 エラストマー素材

エラストマーの下期事業環境は、原料価格が下落する基調。他方で、電気・蒸気などのエネルギー価格が高騰する見込みであり、販売価格の改定を進めていくが、スプレッド悪化は避けられない状況になると予想。その結果、下期予想は上期実績に対し増収減益を予想する。

p. 25 2022 年度 事業環境 高機能材料

高機能材料の下期の事業環境は、スマホ向け光学フィルムが出荷の端境期に入るため、光学フィルムは上期から下期にかけて売上高が横ばい、営業利益は減少を見込んでいる。その他のセグメントについては、上期から下期にかけて回復を予想。結果、上期実績に比べ、売上高、営業利益ともに上振れの予想をしている。これらの事業環境を踏まえ、本日、業績予想修正を発表した。内容については次ページで説明する。

p. 26 2022 年度 業績予想

2022 年度修正業績予想は、売上高 4,120 億円、営業利益 395 億円となり、当初業績予想に対して増収減益の修正となる。事業環境は先行き不透明な状況が続いているが、製販技一体となった収益改善活動、中期経営計画に掲げた 3 つの全社戦略の推進を着実に進めていく。

この見込みの前提は添付資料下段に記載しているので、ご確認いただきたい。

p. 27 2022 年度 配当金予想

当初予想を据え置く。当社は 2010 年から 13 期連続増配を予想しており、今後とも株主の皆様へ安定的に持続的な還元を行っていく。

以上